

ちびっこ

# 鍊金術師の 恩返し

るあか *ruaka*

*ill.* 81無理無理芸人

紹介登場人物



## 1話 錬成堂グランキヤツト

カラーン、コロン。

お店の扉の開く音。

リオンが来たんだ。

「リオン、おはよ！」  
「おはよう、ノエル。いつもお出迎えありがとうございます。で、パパは？ いつものところか？」

リオンはそう言って、僕の目に中身がパンパンに詰まっている麻袋をドサッと置いた。

彼はリオン・ブラックウェル。僕のお父さんの仕事仲間である冒険者で、二十歳過ぎの頼れるお兄さんだ。

「うん、パパまたかくれんぼしてる。十時になつたら僕がおーくんにするから大丈夫だよ！」

僕はニッと笑う。

「ノエルは本当にお利口さんだなー。三歳にしてはめちゃんとハキハキしゃべるし、賢いよな～」

僕は「えへへ、僕、すごいもんね♪」と誤魔化しつつ、内心ドキッとしていた。あれ、三歳くらいになつたらもうペラペラしゃべつてもいいと思っていたけど、まだダメなのかな。赤ちゃんって、難しい。

リオンがカウンターの上から裏側をガバッと覗き込んだので、僕も一緒になつてカウンターの横からひょこつと覗き込む。

すると、カウンターの下で膝を抱えているお父さんと視線が合つた。

「……俺、今日ここで一日をやり過ごしてみせる」

謎の決意を固めてそう宣言するお父さん。

僕は思わず「ふつ」と噴き出した。

「そう言つてやり過ごせたことないだろ、ジル？」

リオンはもうこのやり取りには慣れっこだといわんばかりの顔で、お父さんにそう言つた。

「お前が店の看板を『OPEN』にしていくからだろ……」

「俺じやねえし。ノエルが毎日ひつくり返してんだもんなー？」

僕は「なー」と相槌を打つてキャッキャと笑つた。

「うちの子のせいにすんな。ノエルを巻き込むな」

僕、OPENにしたがらないお父さんに代わつて自分から看板をひつくり返しに行つてゐるんだけど。そういう意味では、お父さんが悪いような気がするよ……？

「分かつたから、今日の分の素材、こん中入れていくからな」

リオンはお父さんの文句を軽く流すと、目の前にあつた木箱の中で麻袋を逆さまにして振つた。信じられないくらいたくさんの中の薬草や木の蔓が、麻袋の中から木箱の中へと落ちていく。

木箱もまた、絶対に入り切らない大きさなのに、ブラックホールのように素材を吸い込んでいた。吸い込まれた素材は木箱の隅の方でキュッと縮こまつている。

「まどーあ、しゅくつてすごいね」

「な。魔導圧縮、すげえ技術だよ」

“魔導”という仕組みはよく分からないけれど、リオンの持つていた麻袋もこの木箱も物を圧縮することができる。人体には反応しないから、驚きだ。

リオンは返事のないお父さんを気にもとめないで、お店の隅に置いてあつた別の木箱をヒヨイと持ち上げる。

「これ、今日の納品用のアイテムだろ？ 持つてつとくからな」

「……頼むー」

カウンターの裏からお父さんが小さく返事をした。

「じゃあな、ノエル。俺もう行くから。さつきも言つたけど、時計の短い針が十になつたら、入り口のあれ、ひっくり返すんだぞ？」

「うん、十時でおーふんだよね。僕、分かるよ♪」

「ヨシヨシ、本当にノエルは賢くていい子だな。じゃあ、また明日な」

「リオン、ばいばーい！」

全身で手を振つてリオンを見送ると、僕は黒猫のくろすけと一緒に時計の前で座つて待機した。暇つぶしにくろすけを撫で撫でする。

「くろすけ、いい子いい子♪」

「ごろにゃ～」

十時になつたら、この『鍊成堂グランキヤツト』がオープンする。なんのお店かと言うと、ズバリ鍊金術のお店。

お父さんの仕事は主に三つ。

一つ、隣の道具屋へ回復薬やらのアイテムを“納品”。

二つ、お店に鍊金の材料を持ってきたお客様の“鍊金代行”。

三つ、お店に来たお客様の武器や防具に注文されたバフ効果を“鍊成”。

この納品、鍊金代行、鍊成がお父さんの鍊金術師としての仕事内容だ。

お父さんは一度お店を閉めようとしたらしくけど、僕を養うためにお店を続ける決心をしてくれた。

ちよつとやる気なさげに見えるし、あんまり楽しそうじゃないけど、なんだかんだ毎日ちゃんとノルマはこなしている。

「んにゃ！」

くろすけが時間が来たことを知らせてくれた。

「十時だ！」

僕は立ち上がりつてくろすけと一緒にお店の外に行き、『CLOSE』の看板をひっくり返して

『OPEN』にする。

ここはライント王国の国境の町ブライア。すぐ隣の大國、ザイラール王国に近いこともあり、たくさんの冒険者が訪れる賑やかな町だ。

グランキヤツトは道具屋と並んでその大通りに立つてゐるため、毎日多くのお客様が来る。今日もすでに数人の冒険者がお店が開くのを並んで待つてゐた。

「ノエル君おはよう」

「おはよ、いらっしゃいませ！」

「今日もパパのお手伝い？ 偉いねー」

「うん！ 僕、お手伝いできるからね♪」

僕はドヤ顔でそう答えた。

そんなこんなで平和な町ブライアの鍊成堂グランキヤツト、今日も開店です。

## 2話 そして、親子に

——ある日の夜。

僕は前世の夢を見ていた。

目を開けるといつも目に入る真っ白な天井。てんじょう。そして横を向けば、同じく真っ白なベッド。僕の視界には一日の時間の大半、この真っ白な風景が映っていた。

僕は幼い頃から病弱で、病院への入退院を繰り返していた。

小学校にもあまり通うことができず、病院に来てくれる家庭教師の先生と勉強をした。

十歳を過ぎた頃には一時退院すらすることができず、ずっとこの病院の個室で過ごしていた。

僕の両親は共に会社の経営者で、お金持ち。

だから僕は最先端の治療が受けられて、綺麗きれいで立派な個室のある病院に入れてもらっていた。

——だけど、両親はほとんどお見舞いには来てくれなかつた。

僕のことなんてもう忘れてしまつたのだろうか。むしろ、僕という息子なんて最初からいなかつたことにしているんじやないかとすら思える。

僕の病気は、最先端の治療が受けられたところで、生き延びられるだけという深刻な物。

最先端の治療なんて受けられなくてもいい。立派な個室じゃなくても、大部屋だつて別に良かった。

——そんなことより僕は、ただお見舞いに来てほしかつた。

お見舞いに来て「大丈夫?」って言ってほしかつた。「頑張がんばろうね」って、言ってほしかつた。

そのうちベッドからも起き上がることができなくなつて、看護師さんの貸してくれたファンタジー小説を読み漁る毎日だつた。

こんなふうに魔法が使えた良かつたのに。僕の病気なんて回復魔法でチャチャつと治せたら良かったのに。

そうしたら僕もこの物語の主人公みたいにのびのびと暮らせたんだろうか。

そんな僕の願望がんぼうが叶かなうはずもなく、僕は十五歳でこの世を去つた。もちろん、最期さいごの時にすら、僕の両親は病室にはいなかつた。



僕は死んだはずだつた。僕の人生はそれで終わりだと思っていた。  
しかし、気付いたらザイラール王国という国の貴族街に住む伯爵家の子として生を享うけていた。  
これつてもしかして、小説で読んだ異世界転生!? まさか、僕には貴族の息子としてのスローラ

イフが!?

初めはそう思つてワクワクしていた。

——だけど、今回も愛されなかつた。

「おい、魔力鑑定の結果が出たぞ。このガキは……私の子ではない」  
僕が生後半年の頃。僕の父親であるはずの伯爵がそう宣言したことがきつかけで、なぜか僕だけが王都のダウンタウンへと捨てられることになつた。

辺りが静まり返つた深夜。フタの開いた木箱に入れられてゴミ溜めに捨てられる。

どうしよう、どうすればいいんだろう。

生後半年で、一人ではどうすることもできない。

僕は、ひとまず赤ちゃんの仕事でもある“泣く”ことから始めた。

「おぎやあ、おぎやあっ！」

お願い、誰か気付いて……！

そんな僕に気付いて、僕を木箱の中からすくい上げてくれたのが、ジル・グランヴィルだつた。  
「よーし、よーし、どうしたお前、こんなところで泣いて……かわいそうに、捨てられたんだ  
な……」

そう言うジルは、とてもやつれた表情をしていた。

この人、どうしてこんなに悲しい顔をしているのだろう。

もしかしたら、この人もこのまま死んでしまうのではないだろうか。

そう思うと、僕の心がキュッと締め付けられた。

「あう、あう……」

僕は彼を励まそうと、彼の顔へ小さな手を伸ばす。

赤ちゃんの手つて、こんなに短いんだ。大丈夫だよつて、頭を撫でてあげたいのに、全然届か  
ない。

「うん？ どうした？ 僕の顔に何かついてるか？」

「あう……あー……」

全然言葉が出てこない。元気出してつて、そう伝えたいのに「あー」はないわあ。だから僕は代  
わりに、「きやつきやつ」と今できるとびきりの笑顔を彼に向けた。

「あはは、さつきまで泣いてたのに、もう笑つてやがる……」

彼も僕に釣られてか、やつれた顔で静かに微笑んだ。

「あい、あいつ♪」

もつと笑つてほしい。そう思つて僕ももつと笑つた。

なぜ、僕はこんなに必死になつてゐるのだろう。この人に助けてほしいから？ もちろん、それ  
を否定はしない。



だけど、一番の理由は……この人が僕に似ていると思ったからだ。心にぽつかりと穴が開いたかのようだ、そんな喪失感マヒカンが伝わってきて、共感してしまった。

「ははっ、お前、可愛いな……」

先程までどこかぎこちない表情だつた彼は力が抜けたかのようにふつと笑い、僕のほっぺをツンツンと突いた。ちょっとくすぐつたい。

彼は僕を抱き抱えたままその場を去り、ダントンタウンから王都の外の街道へと出た。

月明かりに照らされて、彼はトボトボと歩いていく。一体どこへ向かっているのだろう。街道の途中にあつた休憩所キョウケイショにたどり着くと、彼は僕を抱えたままベンチによいしょと腰掛けた。彼は、夜空を見上げていた。僕はそんな彼をじーっと見上げる。

夜空を見上げたまま、彼はポツンとこう呟いた。

「俺……もう、こんな人生終わりでいいんじやねえかつて、そう思つてた」

「あう……」

「俺の人生が始まつたダントンタウンで終わろうと思つてさ、そしたら、なんの因果か、そこにお前がいた」

「あい」

「なんだろうな、お前はそんなつもりないかもしねいけど、『大丈夫だよ』『元気出して』って、

「そう言つてくれてるような気がしてさ」

「あー、あい♪」

「変わつてた！ 僕の気持ち、この人にちゃんと伝わつてた！」

「だから俺さ、お前のために、もう一度頑張つてみようかと思う。鍊金術……絶賛スランプ中なんだが、中級くらいまでならなんとかできるし、やつぱり店、続けようかな」

「あい、あい♪」

「僕は、ひとまず前を向いてくれたっぽい彼に笑顔を送つた。そんな彼もまた、僕を見下ろして笑顔を返す。

「おお、ご機嫌きげんだなあ。よし、決まりだ。俺、お前のために頑張るよ。今日から俺が、お前の『お父さん』だ」

「つ！ あい、あい！」

再び空を見上げた彼に釣られて僕も天をあお仰ぐ。

空には、満天の星かがやが輝いていた。

僕はその後ノエルと名付けられ、正式にジルの養子ようしとなつた。

——ここで僕は、夢から目覚めた。

◇

朝。

「うーん……」

僕はお父さんの布団ふとんからズリズリと這はい出る。

なんだか懐かしい夢を見たなあ。あれからもう一年半か。

お父さんは僕を拾つて以来、目一杯の愛情を僕に注そそいでくれている。

——僕は、初めて親の愛情を知つた。

血の繋がりなんて関係ない。初めてもらった本物の愛情。いつか僕は、お父さんに返したい。

そう思いつつ、今日も僕はお父さんの被つていてる布団を思いつ切り捲まきつた。

「パパー！ 朝だよ！」

「んおつ、さ、寒つ!? お、ノエル、お前がやつたんだな？」

お父さんはそう言つて起き上あがると、変な形の耳栓みみせんをきゅぱつと外す。

「パパが起きないからだよー！」

僕はきやつきやと笑う。

「起こしてくれてありがとう、おはようノエル。パパ、今日も頑張つてカウンターに隠れるから

な！」

お父さんはそう言つて僕を抱き上げて、部屋のカーテンを開けた。  
それによつて目覚めたくるすけは早速日の当たる窓際に陣取ると、う一つと伸びをしてごろんと  
寝転がつた。

### 3話 僕の将来の夢

——十八時、グランキャット閉店。

僕はくるすけと一緒にお店の外へと出ると、『OPEN』の看板を『CLOSE』へとひっくり返した。

「よし、これでおつけー！ くるすけ、お家戻るよー！」

「にゃあ！」

僕の呼びかけに返事をして素直に店内へと戻るくるすけ。僕が言うのもなんだけど、くるすけつて、めちゃくちゃ賢い猫だと思う。

くるすけは、僕がお父さんに連れられてこのお店にやつてきた時からここに住んでいる。

僕が生後半年の頃からずつとそばで見守つてくれて、体中を撫で回しても絶対に怒らない。

とつてもお利口さんだ。

僕は一歳半頃からトイトレーニングを始めて、急いでおまるに駆け込むなんてこともあつた。けれど、そういう時だつてまるで状況を完全に理解しているかのよう、「ぎにゃーー！」つて鳴いて一緒についてくれるんだ。

この建物は一階がお店になつていて、二階が僕たちの居住スペースになつていて。

僕は一階のお店に戻ると、カウンターの奥にある『鍊金部屋』の戸を開けようとした。

「んー……！ やつぱり、開かない……」

引き戸になつてゐるのだけれど、びくともしない。そりやそりや、今はお父さんが明日の納品のための鍊金中で、鍵をかけているから。

「ぐるにゃあ？」

くろすけも危ないよと言わんばかりに、前足の肉球をぼむつと僕の腕へ押し付けてきた。

「うーん……見たいなあ、パパが鍊金しているところ……」

僕はそう呟いてその場にペタンと座り込んだ。くるすけも「ぐるにゃ」と短く鳴いて、僕にくつついて伏せをする。

普段は鍵がかかっていて入れないけれど、鍊金部屋には一回だけ入つたことがある。

作業台の上に筒状の寸胴鍋が三つ並んでいて、部屋の奥の低い台座の上には不思議な魔法陣が描かれているんだ。

まるで、妖しい魔女の研究室のような、子ども心をくすぐる部屋だつた。

「僕にも鍊金、できるかなあ？」

「にや♪」

くろすけがスリスリと擦り寄つてくる。

できるよつて、言つてくれてるのかな？

「あのね、僕ね、大きくなつたらパパみたいに鍊金術師になつて、このお店でパパと一緒に働きた

いんだ」

僕は猫に向かつて一体何を詰してゐるんだろう。だけど、なぜかくろすけなら僕の話を理解して

くれてゐるんじやないかつて、そう思つてさ。

「ごろにや♪」

「ずっと前に、パパが言つていたんだけど、パパ、スランプなんだつて。上手に鍊金できないつてこ

とだよね」

「にやあ……」

「だからね、僕も一緒に鍊金して、パパを助けてあげたいんだ。そうしたら、パパは毎日カウン

ターに隠れなくても良くなるかも」

「にや」

それが、僕の夢。それが、僕のお父さんへの恩返し。

くろすけと一緒に鍊金部屋の前でしゃがんで待つてゐると、引き戸がガラガラと開く。

「お、ノエル、くろすけ、待つててくれたのか。腹減つたよな、ごめんな」

「の一ひんするやつ、できた？」

お父さんは「できたぞ」と言つて僕を抱っこしてくれる。

「僕、お腹ペコペコ！」

「にやあ！」

「ははは、だよなあ。パパもペコペコだ。よし、一階に上がつて飯にするか。まずはくろすけの力

リカリ、用意してやんねえと」

お父さんはスッキリした表情で階段を上がつていつた。いつもそう、仕事が終わると、お父さんはいつも晴れ晴れとした顔になる。

二階に上がつて早速、僕はしゅばつと手を擧げる。

「僕がくろすけにカリカリあげたい！」

「お、サンキュー、ノエル。その引き出しに……」

「ここでしょ？ 僕、分かるよ」

僕はキツチンの引き出しからキヤツトフードを取り出した。

「ははは。すごいな、ノエルは。なら、頼むぞ。量は適当でいいからな」

「うん！」

僕はくろすけ用のお皿を出して、キャットフードをザツと注ぐ。

そして、キッチンの入り口で礼儀正しくお座りをしているくろすけの前にお皿をコトンと置いた。

「はい、くろすけ、ご飯ですよー」

「にやあ！」

ガツガツと食べ始めるくろすけ。

「くろすけ、カリカリおいしー？」

「にやあ♪」

そんな僕たちの後ろでは、お父さんがパスタを茹でながらチャチャッとオムレツを作ってくれていた。

「いただきまーす！ パパ、おいしー！」

卵の形はちょっと崩れていますし、ケチャップで描かれたくろすけはとても猫とは思えない謎の生命体に見える。だけど、お父さんのオムレツ、味はとっても美味しいんだ。

お父さんは料理があんまりできなかつたけれど、僕のために必死に練習してくれていたのを、僕は知つていて。

「はは、良かった。ノエルはオムレツ好きだな」

「うん、大好き！」

お父さんと僕は顔を見合せると、ニッヒ笑い合つた。

ご飯を食べたら家族みんなでお風呂に入つて、一緒のベッドに潜り込む。

早く、僕も鍊金術ができるようになりたいなあ。そんなことを考えながらウトウトする。

## 4話 騎士と道具屋？

朝の開店前、今日もカラーン、コロンと呼び鈴を鳴らしてリオンが素材を届けに来る。

「リオン、おはよ！」

「おはよう、ノエル。パパはかくれんぼかな？」

「うん、かくれんぼ！」

二人であつはつはと笑う。

すると、再び呼び鈴がカラーン、コロンと鳴つて、隣の道具屋のエミリアが入つてきた。

「すみません。おはようございます！」

エミリアは美人のお姉さん。なんだか今日は美味しい匂いがする……。あの腕にかけているバスケットが怪しい……。

「あーっ、エミリア！ おはよー！」

「エミリア様、おはようございます！」

軽く「よっ」と挨拶する僕とは打って変わつて、急に襟を正すリオン。

「まあ、ノエル君おはよう。もう、リオン。様はやめてつて何度も言つていいでしよう？」  
そう言つてふくーっと頬を膨らませるエミリア。それでも美人のままなんて、不思議だ。

「す、すみません、つい癖で……」

「ねえ、リオン、なんでエミリアは様なの？」

僕がそう尋ねると、リオンではなくエミリアが「ふふふ、なんでもないのよ。それよりパパはいる？」と割つて入つてきた。

彼女のその言葉を聞いて、カウンターからひょこっと顔を出すお父さん。

「すみません、エミリアさん。ここです……」

「まあ、ジルさん、好きですね、そこ♪」

ふふふつと可笑しそうに笑うエミリア。

お父さん、ちょっと恥ずかしいやつ……。

「実はミートパイを作つたのですが、作り過ぎてしまつて……良かつたらお昼にでもどうですか？」

エミリアはそう言つてバスケットのフタを開けた。

「あーっ、美味しそう！ ミートパイ、僕、大好きだよ！」

エミリアが僕にも見えるようにバスケットを低い位置で持つてくれているため、僕は覗き込んで「わーい！」と喜んだ。

「ああ、ありがとうございます、エミリアさん。ぜひいただきますね」

ペコリとお辞儀をしてバスケットを受け取るパパ。

あれ、そういえばエミリアに話をはぐらかされた気がする。

リオンは確かに、元ラインツ王国の聖騎士団の騎士様だったんだ。でも今はやめて、このブライアの町を拠点に冒険者をやつてている。

お父さん曰く、槍の扱いがすごく上手なんだつて。

そんなリオンにあんな態度を取られているつてことは、エミリアは？

「ねえ、ねえ、エミリア。エミリアはおじょーさまなの？」

「まあ、ノエル君、難しい言葉を知つてゐるのね？ ふふふ、私はただの道具屋よ」

「こら、ノエル。あんまりエミリアさんを困らせるな」と、お父さん。

「はーい……」

「ああ、いいんです、怒らないであげてください。ノエル君、リオンが変なことを言つてたのは、

誰にも言つちゃダメよ？」

エミリアはそう言つて口元に人差し指を当てた。

「うん。僕、誰にも言わないよ?」

変なことつてきっと、『エミリア様』って呼んだことだ。

何か訳ありのお嬢様? でも、お嬢様が町で普通に道具屋をやっているなんて、そんなことある訳ないよね。気になったつてしようがないか。

「ありがとう、ノエル君。えっと、これが今日の納品分ですね?」

「ああ、俺が持つて行きますよ、エミリアさ……ん」

リオンは素材用の木箱に麻袋の素材をザーッと流し込むと、慌てて納品用の木箱を持ち上げた。

その後、エミリアは納品用の木箱を抱えたりオンと共に隣の道具屋へと帰つていった。

昼過ぎ。一階のダイニングでエミリアのくれたミートパイをいただいた。

「美味しかつた! ごちそーさま!」

お父さんはひと足先に食べ終わつて一階でお仕事をしているので、空になつたバスケットがボツンと残る。

よし、僕がエミリアに返しに行こう!

僕はバスケットを持って一階へと駆け降りた。くろすけも慌ててついてくる。

一階では、お父さんがお客様をしていた。

「回復薬十個ですね。では、薬草を十個と鍊金代の500円をお願いします」

クレドというのは、この世界の通貨のことだ。

「はいよ、これで頼むよ」

お客様はそう言つてカウンターの上に薬草十枚と100クレドコインを五つ置いた。ガタイが良く腰に剣を携えている、優しそうなおじさんだ。

「はい、確かに。では、すぐに鍊金して参りますのでそちらでかけてお待ちください」「はいよー」

お客様はお父さんに言われた通りに窓際のベンチに腰掛けた。

そんなタイミングで、お父さんが僕に気付く。

「……つと、ノエルどうした? ごめんな、パパ今、忙しくてな……」

「あのね、全部食べたから、これ、エミリアに返してくる!」

僕はそう言ってバスケットを高く掲げた。

「おお、マジか。助かるよ。隣だから大丈夫だとは思うけど、気をつけて行つてくるんだぞ?」

「うん、大丈夫だよ!」

「坊や、おつかいか。偉いなあ」

「うん、僕えらいもんね!」

お客様の言葉にそう言つてニッと笑うと、僕はグランキャットを飛び出した。

「にやあ!」

くろすけも一緒になつて飛び出してくる。外にまでついてくるんだ。  
よいしょ、よいしょと入り口の扉を押して道具屋の中へと入る。力がないから扉が開くのがゆっ  
くり過ぎて、呼び鈴もゆつくりカララン……コロン……と鳴った。

「まあ、ノエル君！ くろすけまで！」

エミリアは僕に気付くと、すぐにカウンターから出てきてくれた。

「エミリアー！ ミートパイ、美味しかった！ これ、ありがと！」

エミリアに空のバスケットを差し出す。

「ありがとう、ノエル君。まあ、ちょっと食べにくかつたかしらね？ 大事なお洋服にパイ生地が  
たくさん溢れているわ」

エミリアはそう言つて、僕の服を優しくサッサッと払ってくれた。

「うわあ、ほんとだ。エミリア、ありがとう！」

僕は恥ずかしくてえへへ……とはにかんだ。

「ふふ、どういたしまして。さあ、ノエル君、くろすけ、ちようどお客様も誰も来ていないし、  
一緒にパパのところへ帰りましょう」

そう言つて自然に僕の手を取るエミリア。

あれ、なんか……お母さんと手を繋いでいるみたい。エミリアからは、そんな温かさを感じる。  
前世では、こんなふうにお母さんに手を繋いでもらつた記憶がない。

「うん……」  
慣れていないからか、少し緊張する。それでも僕は、エミリアの細い指をギュッと握り返して、  
くろすけと共に無事グランキヤツトへと送り届けてもらうのであつた。

## 5話 姉御肌な冒険者

あねごはだ

——ある日の昼下がり、鍊成堂グランキヤツトにて。

お客様が落ち着いてきたため、お父さんはカウンターに肘ひじを突いてボケーっとしている。

僕は店内の片隅でくろすけをブラッシングしてあげていた。

「くろすけ、いい子、いい子！」

「ごろにやあ～」

僕のブラシの力加減がちようどいいのか、くろすけは気持ち良さそうにゴロンゴロンと寝返りを

打つていた。

カラーン、コロン。

「いらっしゃ……なんだ、アイラか」

お客様が来たかと思い一瞬反応するお父さんだが、入ってきた人物を見るなり気怠げな

□調に変わった。

「ちよ、アタシ、客として来たんだけじ!?」

赤髪のボニー・テールの映える、引き締まつた筋肉の女性。彼女はアイラ・ツユシロ。リオンと共にお父さんのお店の素材集めを引き受けてくれる冒険者だ。

大きな斧を背負っているから、きっと相当力持ちだろう。

お父さんの素材集めを手伝ってくれている人はもう一人いて、三人合わせて『黒豹』という名前の冒険者パーティを組んでいる。

「アイラ！ いらっしゃい！」

お父さんの代わりに僕がそう笑顔で迎えると、アイラは元気よくニッと笑顔を返してくれた。

「ノエル！ アンタはパパと違つて優しいね！」

「はいはい。で、鍊金代行か？ 鍊成か？」

やる気なさそうにそう尋ねるお父さん。

ちよつと、もつと丁寧に接客して？

アイラはそんなお父さんの態度なんて気にもとめないで、革のグローブをカウンターの上に置いていた。

「これに防御の鍊成を施しておくれよ」

〔了解。承りました〕

お父さんはアイラの革のグローブを持って、鍊金部屋へと消えていった。

「さあで、なんか代行もしてもらおうかねえ……」

アイラはそう呟いて、カウンターに置いてあつた鍊金代用のアイテムの素材リストを手に取つた。

「あつ、アイラ！ それ、僕も見たい！」

「ん？ いいよ、こつちで一緒に見ようか」

アイラがお客様用のベンチに腰掛けて、僕に隣に座るよう促す。

「うん、アイラ、ありがと！」

〔にや♪〕

僕がベンチに座るところすけも僕の膝に乗つてきたので、みんなで一緒に素材リストを眺めた。どれどれ……回復薬を作つてもらうためには薬草と50Cか。そういえばこの前冒険者のおじさんが十個一気に頼んでいたな。

僕がマジマジと見つめていると、アイラは「ああ、そうだ、ごめんごめん」と何かを思い出したように、こう続けた。

「この一番上のアイテムは回復薬って言つて、薬草とお金をパパに渡すと作ってくれるんだよ」

あつ、僕が字を読めないとつて……アイラは面倒見がいいなあ。

「僕、回復薬、知つてるよ！ なんで飲み物なのに、やくそーだけでできるの？」

「そつか、回復薬はいつも見てるもんね。実は飲み薬の鍊金には綺麗な水と空きビンが必ずいるから、ここには書いていないだけなんだ。だから、薬草だけじゃなくてお水も必要なんだよ」

「いいなあ、僕、回復薬作つてみたいなあ……」

思わず漏れ出す本音。アイラはそれを聞き逃さなかつた。

「なんだい、ノエルも鍊金術師になりたいのかい？」

「あつ、うん……パパには秘密だよ？」

「なんで秘密なのさ？」

「えー、恥ずかしいから！」

僕はそう言って笑つて誤魔化す。くろすけには鍊金術師になりたい理由をサラッと言えたけど、人に言うのはなんだか恥ずかしい。

「あつはつは、そとかい、そとかい。それなら、鍊金鍋はまだ難しいだろうし、パパも危ないからつて使わせてくれないかもだから……これ、アタシと一緒に採りに行つてみるかい？」

アイラはそう言って素材リストの『薬草』を指し示した。

「えつ、やくそーを!?」

心が躍る。

薬草を探りに行くなんて……冒険だ！

「ノエルのパパはさ、アタシらみたいな冒険者を雇つてゐるから自分では素材の採取には行かないけど、採取から自分でやる鍊金術師もいるんだよ。冒険者をしながら鍊金術師として生活しているやつだね」

「えーっ！ 楽しそう！ 僕、行きたい！」

「よーし、アタシに任せな！」

アイラは、お父さんが鍊成を終えてカウンターに戻つてくると「ノエルが暇そだから近所の簡単な素材集めに連れてつてあげる」と上手く説明をしてくれた。

お父さんは少しだけ心配しつつも「今はなんでも興味を持つ時期だからな。それなら、頼むよ」と了承してくれた。

僕はうわあーい、と飛び跳ねて喜んだ。

近所の森は弱い魔物しかいないけど、一応念のためもう一人の黒豹のメンバーであるジャックも誘うこととに。

お父さんも「ジャックもいるなら安心かもな」とのこと。ちなみにリオンは王都に帰つていて今日は不在だ。

そしてもちろんくろすけも僕からピッタリ離れることなくついてきた。

こうして僕とアイラとくろすけは冒険に出掛けるのであつた。

## 6話 魔物より魔物

「ぼうけん、ぼうけん、初めての冒険～♪  
にやあ♪」

僕はルンルンで町の大通りを歩く。

町の外に出るなんて、生後半年の頃にお父さんに拾われてザイラール王国からこのブライアの町まで来た時以来だ。しかもあの時はずっとお父さんに抱っこされたままだった。でも、今は違う。自分で歩いて町の外の森に行つて、薬草を採取するんだ♪ ひとまず僕のもう一人の用心棒を確保するために町の酒場『黒猫亭』へと入る。

「さかばー！ くろすけも入つていいの？」

「ああ、いいよいよ。ペットなら動物でも魔物でもおつけーだよ」

アイラはそう言って、ズンズンと奥へと入つていった。

広いフロアにたくさんの木製のテーブルセットが置かれており、奥にはマスターのいるカウンター席があつた。

なんだか酒場に入つただけで、もう冒険者になつた気分だ。

僕とくろすけもアイラに続いて酒場の奥まで走つていき、アイラよりも早く、カウンターに座つてチキンにかぶりついている大男にタッチした。

「ジャックー！」

「んお!! ノエルじやねえか！ どした、迷子かよ？」

こんがりと日に焼けた褐色の肌に、筋骨隆々の巨体。ジャックの隣に立てかけてある大剣ですら、僕よりもずっと大きい。

「違うよ、ジャック、やくそー採りに行くよ！」

「あ？ 薬草だあ？」

まるでチンピラのような口調で問い合わせてくるジャック。そんな彼に、アイラが事情を説明してくれた。

「んだよ、ただのお守りに俺を巻き込むんじやねえよ。つたく、しゃーねえなあ……」

ジャックは文句を言いつつも急いでチキンを食べ終えた。しかも僕にも一口くれた。なんやかんやジャックが仲間に加わってくれた。

僕はマスターにバイバイと手を振つて酒場を後にする。そして、走つて町を出るのであつた。

町から大平原へと出て、街道には入らずにすぐ南のカルムの森へと足を踏み入れた。

するじ、早速スライムが「キューッ！」と鳴きつつ飛び出してきた。

「あつ、スライムだー！ 可愛い！」

キヤツキヤと喜ぶ僕を背に、ジャックは悪魔の形相で無慈悲に大剣を振るつた。

「邪魔だ、雑魚が、いちいち出てくんぬ！」

「キュー……」

スライムはお目目を『××』にしながら、呆氣なく消えてしまつた。

「あう……スライム……かわいそ……」

ジャックって、雰囲気怖いから魔物よりも魔物に見えるんだけど……。良く言えば『ワイルド』、

悪く言えば『チンピラ』って感じ。

「あつ、ノエル、スライムゼリーがドロップしたよ。拾つてこん中入れておいで」

アイラはそう言って麻袋を僕に渡してくれた。

確かに、スライムがいたところにぶにぶにのアイテムが落ちている。

「うん！」

しゃがんでスライムゼリーをツンツンと突いてみると、プリンのようにプルルンッと震えた。

た、楽しい……！

くろすけも一緒になつてベシツと猫パンチをする。

そして、掴んでみるとひんやりと冷たい。溶けてゼリー状になつた保冷剤みたいな感じだ。

「わーい！ スライムゼリー、捕まえたー！」

「にやあー♪」

何に使うのかは知らないけど、嬉しい。僕はスライムゼリーを大事に麻袋へと入れた。

「おら、テメエはこれを採りに来たんだろうが。これが薬草だ」

ジャックは大剣の先で道端に生えている薬草をちよんちよん突く。もう、せつかちなんだから。

「うん！ やくそー！」

僕はしゃがんで薬草をプチツともぎ取ると、それも麻袋へ入れた。

要領が分かつた僕は、調子に乗つて薬草を集めまくる。すごい、薬草つてそこら中にたくさん生

えているんだ。

「アイラとジャックとリオンは、いつもこーやつてパパの素材、集めてるの？」

「そうだねえ。ここは初級の素材しか採れないからあんまり来ないけど、森とか洞窟とかで集めることが多いよ。そんで、リオンが毎朝アタシらの分もまとめて納品しにいつてくれるんだ」

「すごい！ いつも、ありがとー！」

「何がいつもありがとうだ。ガキのくせに偉そなこと言つてんじやねえ」

「ええ……」

ジャック……感謝したのになぜ怒つてる？ すると、アイラがジャックのお尻に思いつ切り蹴りを入れた。

「いつてえ！」

「ごめんよ、ノエル。どういたしまして」

アイラは申し訳なさそうに僕に向かって手を合わせた。

「あはは……だいじよぶ……」

「さて、んじや、最後にその湧き水わでも汲んで帰るかね。これで、回復薬セットの完成だ」

アイラがそう言って指差した岩はお椀型わんがたにえぐれており、水がこんこんと湧き出でていた。

「うん！ 僕がやりたい！」

「はいよ」

アイラに空きビンをもらい、コルク栓せんをきゅっぽつと外して水を汲んだ。

「できたよ！」

「あーあ。ノエル、服いきびしょびしょになっちゃったね」

うつむくと、服のお腹の辺りの色が変わってしまっていた。

「あう……」

「そうだ、ふふん、いいこと思いついちまつたよ」

アイラはそう言って僕の脇を持って抱き上げると、僕をジャックの後頭部へと押しつけた。

「なつ、冷つて!?」

「ほら、ジャック、ノエルもう疲れたってさ。肩車かたぐるましてやりなよ」

「ふざけんなよ、クソツ、髪はびしょびしょじゃねえか！ ……つたく、しょーがねえなあ。しつかり掴まつてろよ」

ジャックは僕の足を掴んで僕が落ちないようにしてくれた。やつぱりジャックは口が悪いだけで、優しい。

「わーい、ジャック、ありがと！」

僕が嬉うれしくなつてジャックの髪をギュッと握つて引っ張ると、彼は「おいこらクソガキ！ 髪引つ張んじやねえは飛びたらどうすんだよ！」とブチギれていた。

「あう……ごめん……」

日も暮れる頃。無事に鍊成堂グランキャットへ帰還すると、お父さんが上回復薬を小さな木箱にたくさん入れて待つていた。

「パパー！ ただいまー！」

「おかえりノエル。初めての採取はどうだった？」

お父さんはそう言つて僕を抱き上げてくれるが、すぐに「冷てつ!?」と言つ。

「あのね、やくそーたくさん採つたし、スライムゼリーもゲットした！」

僕は満面の笑みでそう答える。お父さんは「そうか、良かつたなあ」と頭を撫でてくれた。

「アイラ、ジャック、これ、持つてつてくれ。ノエルが世話になつたな」

そう言つて小さな箱を差し出すお父さん。

「なんだい、アタシが勝手に言い始めたことなんだから、そんな気、遣<sup>つか</sup>うんじやないよ」

「んだてめえ、要<sup>い</sup>らねえのか？ なら、俺が全部もらつていくわ。ありがとよ」

ジャックはお父さんから木箱をひよいつと取り上げると、そそくさと出て行つてしまつた。

「あつ、こら！ 誰も要らないなんて言つてないんだよ！」

ブンブンのアイラも、ジャックの後を追うようにお店から出て行つた。

「忙しいやつらだなあ……」

「なあー」

「にやあー」

僕が採取した薬草と湧き水の入つたビンはお父さんにプレゼント。

スライムゼリーは記念に専用の木箱に入れて、寝室に置いた。

それ以来僕は、暇さえあれば用途の分からぬスライムゼリーをふにふにして遊ぶようになつた。そんな僕たちに忍<sup>しの</sup>び寄る怪しい気配があることを、この時の僕たちはまだ知らない。

## 7話 納品数が足りない？

ある日の朝。

いつものようにリオンに道具屋納品分の木箱を持つて行つてもらう。

だが、彼はすぐにエミリアを連れて鍊成堂グラントヤットへと戻つてきた。

「エミリア、おはよー！ あれ、リオン、また来た？」

「おはよう、ノエル君」

エミリアは優しく微笑む。

「ん？ エミリアさん、おはぎつす」

お父さんがカウンターからひょこつと顔を出す。安定のかくれんぼだ。

「ジルさん、おはようございます。すみません、さつき納品していただいたアイテムなのですが、回復薬が、二十個足りなくて……」

エミリアは申し訳なさそうにそう言つた。

「えつ、二十個!?」

目をぱちくりとさせるお父さん。僕もびっくりだ。納品数が足りないなんて、僕がここに来て以来初めてのことだつた。

「俺もエミリアさんと一緒に何度も確認したんだけど、マジで八十個しかなかつたんだよな……」

なんてこつた。回復薬は毎日百個納品。毎日売り切れるらしいから、百個用意するのはマストな

41 ちびっこ鍊金術師の恩返し

はずだ。

「すみません、余分に生成していないでしようか……？」

あくまでも申し訳なさそうなエミリア。怒っている訳じゃないのは明らかだ。

「すみません、いつもぴったりの生成で余分はありません。今回もいつも通り百個作つたつもりだつたのですが、本当にごめんなさい。不足の二十個分、生成でき次第持つていきます」

お父さんは恐縮しながら謝つた。

「ああ、こちらこそすみません。ジルさん、開店後はお忙しいでないように……」

「いえ、ミスしたのはこちらなので……」

「俺、急いで追加の素材採つてくるわ！」

リオンはそう言つてお店を飛び出して行つた。

「では私もこれで。ご無理なさらない程度で大丈夫ですので」

と、エミリアもお店を後にした。

「んあー、百個生成したと思つたんだけどなあ。おつかしいな……まさか俺、まだ三十五なのにもうボケが始まつて……!? はあ、鍊金するか……」

お父さんはトボトボと鍊金部屋へと入つていつた。

「パパ……」

お父さん、大丈夫かな。心配で鍊金部屋を見つめていると、くろすけが「ごろにや～」と鳴いて

擦り寄つてきた。心配するなと言つてくれているようだ。

「くろすけ、いい子、いい子～」

くろすけの頭を撫で撫ですると、くろすけは目を閉じて幸せそうに僕の手のひらに頭を押し付けってきた。

——何はどうもあれ閉店後。

お店の合間になんとか追加の納品分と、閉店後に明日の納品分も生成し終えたお父さんは、もうヘトヘトになつていた。

それでも僕やくろすけのお世話をしてくれて、ベッドに入ると耳栓をしてすぐに死んだように眠りについた。

「パパ、いい子、いい子。お疲れ様」

お父さんの頭を撫で撫ですると、僕もお父さんのベッドに潜り込んで一緒に眠つた。

『ノエル！　おい、起きんかノエル！　全く、そろそろ発現してもいい頃じゃろうて。緊急事態

じゃ、ノエル！　起きろこのドチビおたんこナス！』

誰!?　僕の頭の中に直接、雑な悪口を言つてくるのは!?

ガバッと身体を起こすと、真っ暗な視界の中で黄色いお目目が二つキラーンと光つてゐるのを見

つけた。

「くろすけ……？」

「おおっ、ようやく通じたか……！」このタイミングで超能力のスキルが発現したのはデカい！』  
「超能力……？」

なんかくろすけが僕の頭の中に直接意味分かんないことを言つてくる。超能力のスキルが発現? 何を聞く? 二病みたいなことを……。

「ぐるにやー」

『そうじやつた、今はそんなことは後じや！　とにかく一階の店へ急ぐのじや！』

「一体何が何やら……」  
「ていうかくろすけ  
なんて讀し方そんなにシシくさいの……？」  
「ちよこど  
思つてたのと違つたかも。

『何をボサツとしておるのじや！ いいから早くついてこんか！』

「わ、分かったよ……！」

とにかく緊急事態らしいので、僕は急いで、お父さんの腕をうよつこ踏んでしまう。

「あつ、パパ、ごめ……」

「うーん……」

お父さんは唸うなつて寝返りを打つ。大丈夫、起きなかつたみたい。

「くろすけ、待つてー！」

慌ててくるすけの後を追いかけて、慎重に足踏みしながら階段を降りる。足を滑らせたら危ないからね。

——時刻は午前二時過ぎ。

僕か一階のお店にたどり着くと  
くろすけか一四の子猿にシャーッと威嚇をしているところ  
だつた。

「えっ、なんで猿!?」

子猿だけではない。お店の床には変な模様の魔法陣が妖しく光っていた。

「カニニツ、カニカ  
をかわしてしまう。

あらうことかこつちに向かつて、お尻。ベン。ベンをしている。

そして、子猿は側に落ちていた巾着を拾つて魔法陣の中へと飛び込む。すると子猿ごと魔法陣が消えてしまつた。

## 8話 僕のスキル

「今のウザい猿、何!?」

僕は思わずそう叫ぶ。大丈夫、お父さんは変な耳栓のおかげで音は全く聞こえてないから、起きちゃうことはない。

「ぐるにゃ……」

『あやつは使い魔の一種じやろう。恐らくあやつをここに送り込んだ召喚士じょうかんしが外にいたはずじやが、もう、逃げられておるじやろうな』

くろすけはそう言つて、ちゃんと床に伏せた。

「使い魔……召喚士……」

何そのファンタジーなワード。急に起こされて急に色んなことが一度に起こつて、僕の頭はショート寸前だった。

『ノエルよ、すまん。混乱しておるじやろうな。ひとまずあのクソ猿がやつたことを確認するとしよう。一緒に納品用木箱の中のアイテムを数えてはくれんか』

『納品用の木箱？ まさか……！』

僕は慌ててくろすけと一緒に納品用の木箱のフタを開け、一番上に並べられていた回復薬の数を数えた。

「七十八……七十九……八十。八十一……あれ、もうこつからは別のアイテムになつてる！ うそ、回復薬が八十一個しかない！」

僕は頬を両手で挟んで、ガガーンと絶望した。

『ふむ、十九個減つておるな……』

『あの猿の持つてた袋、の中にパパの作つた回復薬が入つてたつてこと!? 泥棒どろぼう!?!』

『そう考えて間違いなさそうじやな。くつ、こんな姿でなければ、あんなクソ猿など一瞬でどうにかできたものを……』

くろすけは悔しそうに言つた。

『今日の納品分が足りなかつたのも、あいつのせいってことかあ……。そうだよね、パパはやる気こそないにしても、毎日ちゃんと働いてるんだもん。急に生成する個数を間違えたりなんかしないよ』

『うむ、あやつは根は眞面目なのじや。しつかりと数を確認してから木箱に入れておるはずじや』

『もー、誰だよ、パパにこんな意地悪をする召喚士つてやつは！ くう、許せない……！』

ダンダンと地団駄を踏み、そしてハツとする。

『そいいえば、なんでくろすけつてしまってるんだっけ？』

召喚士の件は、今はもうどうしようもないから置いておくとして、今度はくろすけの確認だ。

『違う。ワシがしゃべっておるのではない。お主がワシの考えを読み取つておるのじや』

『どゆこと……?』

『言つたじやろう。お主の中に眠つておつた超能力のスキルがようやく発現したのじや』

『超能力つて……僕の方? くろすけじやなくて?』

『お主の方じや。ワシには「鑑定眼」かいていがん』というスキルがある。それでお主を見る限り、お主には間違

いなく超能力のスキルがあるのじや』

『えー、くろすけのその鑑定眼? つていうのも気になるけど、僕に超能力!? ねえ、くろすけ、

僕の超能力つて、どんなことができるの?』

『ぐるにや』

『そこまではワシにも分からん。鑑定眼はただ対象のステータスを確認するのみ。ひやっかじてん百科事典ではな

いのじや。気になるのなら、ワシを使って試してみるか?』

『試すつて?』

『お主がワシの考えておることを全て感じ取ることができるのか、否か、じや。とりあえずそこに突つ立つておれ。ワシの声を感じ取つたら返事をせい』

『分かつた!』

僕はくろすけを見つめつつ、その場に立つていた。

「……」

しかし、何も聞こえてこない。

「……」

もうしばらく辛抱しんぱうして待つていると、やがてジジイ声でこう聞こえてきた。

『……ドチビおたんこナス』

『あー、ドチビおたんこナスつて言つなあ!』

その悪口、なんか雑で嫌なんだよ……!

『ふむ。結論が出た。ワシがお主に話しかけようと思った時のみ、お主はそれを感じ取るらしい』

『ううなんだ。じやあ、僕もやつてみるよ。くろすけも聞こえたら教えて』

『いいじやろう』

つまり、僕はテレパシーができるつてことだよね。念話つてやつだ。頭の中でくろすけに話しかけるように……こうかな?

『……ジジイ猫』

『誰がジジイ猫じや!』

くろすけはすぐさま反応してシャーッと威嚇した。

『おお、できる! 僕、すごくない!』

僕はわーいとバンザイをして喜びを表現する。そんな僕を見てくろすけは『はあ……』と念話で

ため息をついてきた。

『全く、調子のいいやつじやのう』

「くろすけに言われたくないんだけど

『にやんじやと……！ まあ、よい。今は言い争つておる場合ではない。スキルが付与される理由は様々じや。スキル会得のための修練しゅうれんを積む、死の淵ふちから逃れるために発現する、はたまた……前世の心残りからか……』

『前世の心残り……超能力……きっとそれだ、僕、信じてもらえるか分からぬけど、前世の記憶を持ったまま、前世とは違う世界で生まれ直したんだ』

『異世界転生というやつじやな。ワシは信じよう。お主がジルに連れてこられた時から、お主のステータスには超能力の項目があつた。生後半年の赤ん坊が偶然スキル持ちであると言われるより、異世界転生と言われる方がしつくりくるわい』

「くろすけ、信じてくれてありがとう。前世の僕はね、病弱で、ずっと病院のベッドに寝たきりだつたんだ」

『にやんと……かわいそうにのう』

「ほら、超能力って言つたら、物を浮かせることもできそうじやない？ だから、寝たきりでなんでもできるように、潜在的せんざいてきに超能力を欲していたのかも」

『ふむ、なるほどのう』

「つて言うか、くろすけってやつぱり人間の言葉を理解してたつてことだよね？」

『うむ』

「じゃあ、僕が鍊金術師になりたいこととか、パパのお店を手伝いたいと思つてていることとかも理解して聞いてたつてこと……？」

『うむ』

「えーっ、恥ずかしい！ パパには言わないでよ！」

僕は顔を赤らめてモジモジしながらそう言つた。

『心配せんでも、ワシにはお主と話すことしかできん』

「あ、そつか……」

『それよりもノエルよ。鍊金術師になりたいのであれば、今がその時かもしけんぞ』

『えつ、どういうこと……？』

『お主が不足分の十九個の回復薬を鍊金するのじや』

『僕が!?』

早くやりたいと思つていた鍊金術を、今、ここで僕がやるの……？ 僕は自分の胸がドキドキと高鳴るのを感じた。